

2020年1月31日

私立大学図書館協会  
国際図書館協力委員会  
委員長 御園 和之 様

西南学院大学図書館  
山下 大輔

## 2019年度海外認定研修 報告書

2019年12月4日～7日にかけて、台湾図書館研修に参加してきましたので、以下のとおりご報告いたします。

### 1. 訪問先及び参加動機

本研修のオフィシャルな訪問先は以下のとおり。

12月4日 台北市立図書館総館  
12月5日 国立政治大学図書館・国家発展委員会檔案管理局・中華飲食文化図書館  
12月6日 国立台湾図書館・国立台湾大学図書館  
12月7日 台北市立松山機場智慧図書館

これに加えて、訪問先で発生した個人的興味により、急遽12月7日の自由時間に以下の図書館を訪問した。

12月7日 台湾国家図書館・台北市立図書館長安分館

本研修への参加動機は、歴史的にも、距離的にも密接な関係にある台湾の現在の状況を図書館の視点から見てみたいと常々思っていたことである。独自に訪問することも考えていたが、今回このようなオフィシャルな訪問団を結成出来ることは貴重な機会であると判断して参加を決意した。

### 2. 台湾概要

近年の台湾の歴史は、1896年に創設された台湾総督府を中心とする日本統治に始まり、1945年の終戦を経て、1949年の台湾国民政府時代へと続く。1996年台湾初の総統民選が実施され、李登輝が選出された。それ以前は、蒋介石、蔣経国による国民党独裁が続いていた。2000年民進党の陳水扁が総統に選出された。台湾史上初の政権交代である。2020年1月に総統選が実施され、蔡英文

文が再選されたことは記憶に新しい。私たちが訪問した時期は、翌年に総統選を控え、政治的に緊張感の高い時期であった。まだまだ、歴史が浅く、大きな政治問題を抱える国であることを、訪問した図書館でも実感することが出来た。

今回の訪問で得ることが出来た最も大きな収穫は、民主化されて、まだ日の浅い国の実情を図書館の文脈でも垣間見ることが出来たこと、そして、中国問題の解決策が見えない中で、生きる人々、そして図書館の状況を知ることが出来たことである。

### 3. 各訪問先について

#### (1) 台北市立図書館総館

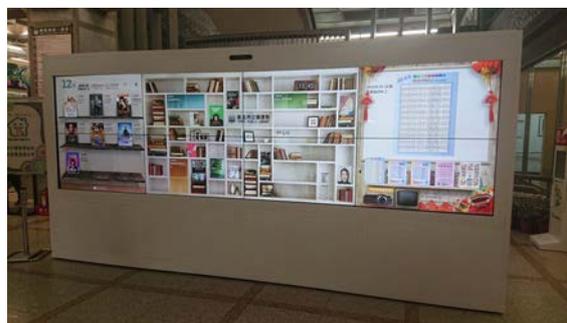
1952年に4つの図書館を合併して、台北市立図書館が設置され、発展を続けている。1990年に開館した中央図書館に加えて、44の分館、12の小規模閲覧室、8つのインテリジェンスライブラリー(無人資料室)、及び10の無人貸出ステーションを有している。中央館である総館の入口には、オススメ本の展示を兼ねた、自動展示・貸出装置が配置され、入口を通ると、大型デジタルサイネージが入館者を迎え、様々な資料、イベントの紹介に利用されていた。IT機器の活用を目指しているものの、建物としては、開館30年を経過しており、やや老朽化している。台北市の人口は約260万人であるが、台北都市圏の新北市、基隆市を加えた人口は約700万人である。資料の保存スペースは不足しており、現在新館建設計画中であり、現在の総館の約2倍の規模の図書館が計画されている。

総館以外でも様々なサービスを展開している。子どもと高齢者に焦点をあてているところは、日本と同様であろうか。例えば、2015年には、コンビニでの受取サービスをファミリーマートと提携して開始しており、現在は、セブンイレブン、ハイ・ライフとも提携している。有料ではあるものの、台北はコンビニ密集都市で、サービス対象のコンビニだけでも、約1万店舗が展開されており、便利なサービスである。また、セブンイレブンとは、店内に300冊程度の児童書等を配置したミニコーナーの設置も展開している。帰路に立ち寄ったが、店舗の片隅で、親子連れが読書を楽しんでいた。その他、無人図書館が市内に広く展開されている。

館内の印象は、平日であったことも影響していると思うが、利用者、特に子どもが少なかった。逆に高齢者向けの活動室が準備され、ボランティア等を行っていた。台湾においても、少子化は深刻であるが、その一旦を垣間見た思いである。



自動展示・貸出機



大型デジタルサイネージ

### (1-2) 台北市立図書館長安分館

公式な訪問先ではないので、詳細は割愛するが、中央館では見る事が出来ない、市民の日常としての図書館利用を感じることが出来る。これから訪問される方にも、総館と分館を合わせて見学されることをお勧めする。

### (1-3) 松山機場智慧図書館

無人の資料貸出ステーションである。利用カード所持者のみ入館可能であり、自動貸出機で貸出を行う。今回訪問したのは、空港に設置された図書館であった。利用については、特に問題無く行われていたものの、資料の選定やメンテナンスは、手が回っていない印象である。盗難について、性善説で運営されていることが、国民性を感じさせる。



完全無人の図書館

### (2) 国立政治大学図書館

台湾政治大学は、1927年南京に設置された南京国民政府中央党務学校が前身である。当時は、上級公務員養成施設であったが、台湾にて1954年に復興された、現在の大学は、膠着する中国との関係から、台湾での高等教育の振興を目的として設置された。現在は10学部47研究科を要する台湾を代表する人文社会学系の総合大学であり、約16,000人の学生が在籍している。今回は、2019年に建設され、試験運用中である達賢図書館を見学した。院生のみでの利用で、学部生は、まだ利用出来ないという説明であった。中央図書館にあたる中正図書館とは別に整備されたこの図書館は、自主学習の推進、アクティブ・ラーニングの推進、多様な学習素材への対応、複数の領域を跨いだ学習への対応等を目的として整備されている。中央の巨大な吹き抜けの周囲には、3面に書架が配架されており、斜めにも視線が通ることから、巨大な書籍の建造物の中にいるような印象であった。

詳細は聞くことが出来なかったが、図書館システムは、Exlibris社のAlmaが導入され、館内の検索端末では、ディスカバリーサービスが展開されていた。後ほど、記述する国立台湾大学においても、同様の状況であり、台湾を代表する大学が2019年に先行して導入しているようである。

歴史的には国民党との結びつきが強い大学だと思われるが、現在の組織、そして、新しい図書館からは、自由闊達な雰囲気を感じることが出来た。その上で、社資中心という、主として中国関係を含む歴史的資料を取り扱う組織が位置付けられていることも、特徴の一つではないかと感じた。

建物は既に完成し、試験的利用も開始されているが、正式なオープンは、効果的なタイミングを

待っているとのこと。



吹き抜け



PC ルーム

### (3) 国家発展委員会檔案管理局

公文書を始めとする各種ドキュメントを保存するための施設として、2001年に設立された。文書の収集、状態確認、保存、メタデータ付与、修復、媒体変換、オンライン公開、利用までを担うアーカイブ施設である。各機関で作成された文書のうち、恒久的に保存するものが、こちらへ移管され、国の資産として蓄積されていく。価値があると判断されれば、個人所有の資料も収集対象としている。また、その場合、対価を支払うこともある。2001年の設立以来、約6,000件の公文書に関する問い合わせを処理している。

職員構成は、約70%が資料を取り扱うための技術者で、残り30%が事務系列の職員である。基本的には、国家試験合格者が配属されているが、一部大学職員からの移籍者等も含まれているとのこと。

施設内見学では、資料の電子化、修復等を行っている現場を視察した。高度な技術を持ち、最新設備の中で作業にあたる風景を確認することが出来たが、作業の多くは、業務委託で実施されており、専門業者の技術者が機材も含めて、業務を請け負っている。

資料の紹介や広報にも力を入れており、訪問時には、砂糖産業の歴史に着目した、Taiwan Sugar Archives Exhibition が開催されていた。



デジタル化作業



修復対象資料

#### (4) 中華飲食文化図書館

今回唯一訪問した専門図書館である。台湾の保険会社を中心とした三商巧福 (Mercuries Group) によって 1989 年に設立された。創設者が、若い時に東京で中国の飲食に関する素晴らしい書籍に出会ったが、高価で手に入らないという経験をした。その後、台湾でビジネスに成功し、様々な飲食事業等も展開するようになり、社会貢献の一貫として、飲食に関する専門図書館を設立したとのこと。

特徴としては、30 年以上の歴史がある専門図書館であり、市中の大学図書館よりも、飲食関係の蔵書が充実している。飲食に関する学術振興に力を入れており、大学との連携、独自の専門雑誌類の出版、学位論文等への助成等を積極的に行っている。また、歴代総裁が国賓を招いた際のメニュー等も保存されている。研究目的及び料理に関係する方 (シェフ等) の利用が多い。広報活動にも力を入れており、各種イベントの開催、2 年毎の海外フォーラム等を実施している。

このように、料理分野に特化して、図書館業務を行っており、成果を出している図書館である。専門図書館であることもあり、あまり政治的な影響を受けず、独自の路線を進むことが出来ていることも、成功のポイントかもしれないと感じた。台湾では唯一の料理専門図書館である。



助成に応募された論文

#### (5) 国立台湾図書館

日本統治期に、台湾総督府図書館として設立された台湾で最も歴史ある図書館である。大戦後は、台湾省立台北図書館、国立中央図書館台湾分館と名称変更を経て、2013 年に現在の国立台湾図書館に改称された。所蔵資料としては、2007 年に設立された台湾学研究センターがあり、台湾研究に必要な資料を提供している。現在力を入れている事業として、親子センターの設立、障害者支援、台湾学、文献保存等ということで、公共図書館として、利用者を支援する側面が強いように感じた。特に、台湾学研究センターでは、これまで年代によって自国の歴史についての学習内容がまったく違うことを問題視し、特に自国史教育が不足しており、日本統治時代を含めた実感の無い世代へのアプローチに力を入れている。台湾は比較的親日国と言われているが、その内容や理由は世代によって、私の想像以上の格差があることを知ることが出来た。日本に対する感情は複雑なのです、という担当者の言葉が印象深い。

また、台湾には、この国立台湾図書館 (National Taiwan Library) と、台湾国家図書館 (National Central Library) がある。それぞれ異なる設立経緯を持ち、蔵書構成、担う役割、配置されている

職員の階級等も異なることを知ることが出来た。国立台湾図書館の職員からも、国家図書館との比較に関する発言もあった。このような状況を知り、どうしても国家図書館の様子を見に行きたくなり、自由時間に来訪することを決意させてくれた貴重な体験でもあった。

今回は、館内に設置されている資料の修復室である、台湾図書病院も見学した。多くの資料が、館内で修復されている様子を確認することが出来た。しかし、修復にあたる職員の多くがボランティアスタッフであった。資料の修復について、この図書館内の取り組みとしては、国家として力を入れているという状況ではないのであろう。

親子センターの設立等多くのプロジェクトが進行していたが、予算は経常的に確保されているわけではなく、毎年結果が査定されるとのこと。場合によっては、事業の継続性も保証されていないことが担当者の話から判明した。実際に、事業が中止されることがどの程度あるのかは不明であるが、常に危機感を持ちつつ業務計画を検討していることが伝わってきた。



閲覧室



台湾学コレクション

## (5-2) 台湾国家図書館

公式な訪問先では無いので、詳細は割愛するが、当初は国民政府により南京に設けられ、その後台北に復興されたものである。国立台湾図書館では、ほぼ見かけなかった漢籍コレクションを中心とした貴重書庫等、2つの図書館の由来の違いからくる、コレクション、サービス等の違いを感じることは、現在の台湾を知る上で非常に有益である。

## (6) 国立台湾大学図書館

台湾を代表する国立大学であり、前身は、日本統治時代の台湾帝国大学である。社会科学図書館と中央館の二つを見学した。社会科学図書館は、日本の建築家である伊東豊雄の設計である。財界人の辜振甫氏らの寄付により 2014 年に開館した。館内は、巨大な木の子を想像させる白い柱と、

竹で作られている歪曲した書架で、独特の雰囲気である。正直資料の利用、管理としては使い勝手が悪いようには思うが、学習のための滞在空間として見ると、魅力を感じる。新しい時代のシンボル性を重視したものと推察する。

中央館は、1998年に現在の建物が開館している。図書館全体として、約430万冊の書籍、320万冊の電子ブックを所蔵している。空間、組織、サービス、多様化といった重視するキーワードは私達と同様の課題を持っていることを実感出来た。施設面では、台湾第一号の自動化書架を導入したことで知られている。約120万冊の地下自動化書庫を整備している。現在、国家図書館でも自動化書庫建設計画が進捗中とのことであった。この事例からも分かるが、館長の発言として、台湾の各図書館の中心、最も進んでいる図書館は、台湾大学図書館であり、他の多くの図書館が追随しているとのことであった。

2019年より図書館システム Alma を導入している、また独自アプリの提供、横断検索システムの提供等多くのシステムを管理、運用している。新しいシステムに職員が戸惑うこと等がないか質問してみたが、職員約120名のうち、6割程度が大学院卒で、英語に対する言語的ハードルは低く、技術的職員も充実していることから、各種システムを取り扱うことも特に問題無いとのことであった。予算についても、OBからの寄付が充実していることもあり、現在のところ深刻な状況では無いとのこと。教育に関する課題というよりも、より充実した資料の提供や環境の整備といった、基本政策の充実に力が注がれているように感じた。



振甫先生祈念図書館



自動化書庫

#### 4. まとめ

台湾は、中国問題を常に内包しており、教育の方向性や社会インフラへの投資等の考え方が、記憶に新しい時代に大きく変動している。中国との関係も、将来的な解決策は提示されていない。訪問時期が総統選前ということもあり、政治的にもナーバスな時期ではあったが、将来が大きく変わるかもしれない、ぼんやりとした不安の上に成り立つ、それぞれの図書館員の思いを感じ取ること

が出来た。

図書館の役割、位置づけを各所属者の方々から聞くことが出来たことも、大きな収穫である。台湾国立図書館と国家図書館の関係、大学図書館と公共図書館の関係について、図書館事情のイメージを掴むことが出来た。今後、より詳細な事例の研究にも繋がるように思う。

台湾の図書館は、まだまだ日本の図書館組織が抱える、資金、人材の問題に直面していない、又は直面し始めたばかり、という状況のように思える。多くの国家試験を合格した公務員が、それなりに配属されており、日本のような業務委託や非正規化の問題へ踏み込む前のように思う。多くの女性職員が活躍していたが、彼女たちも、図書館はライフステージに関わらず働けるよい職場であり、モチベーションも保っているという趣旨の話聞くことが出来た。今後の図書館業界、特に専門的人材を、どのように確保するのか、新しいサービスが求められる中、これまでのサービスの、どの部分を削っていくのか、教育体制をどのように整備していくか、大きな決断も必要になると予想されるが、時代に流れに沿った変化が出来るかどうか、将来に渡っての興味は尽きない。台湾は、今後歴史を積み重ねていく経験を積んでいくことになる。図書館の役割も、また日本とは異なってくるものと予測される。今後も、注視していきたいと思う。

最後に、本研修旅行を企画、実施いただきました丸善雄松堂株式会社、図書館総合展運営委員会、近畿日本ツーリストの関係各位にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

以上